# フリースポット

## 情報を自ら求める努力

木田　宏

長年住み慣れた文部省を辞任したとき、情報が跡切れてしまったという事実に愕然とした。それまでは、必要な情報が、次から次へと伝えられてくる。求めなくても、持ち込まれてくる情報だけで、目の前が一杯になってしまう。下からの相談、上からの指示や注文、外からの陳情、様々な会合、報道通信など、とても全部に対応していることは出来ない。勢い不要なものは切り捨て、あるいは、人の処理に委ねて、始末を付けなければならないものだけに対応するということになる。

ところが、退官した途端にその情報の流れが止まってしまう。すると自分を取り巻く周囲の状況が静止画のように固定して、日一日と視界から遠ざかっていくように見えるのである。これは、定年を迎え職場を去っていくサラリーマンなど、多くの人が味わう寂しさであろう。決して自分だけのものではあるまい。

しかし過去は過去として、新しい生活設計を組み立てようとしたとき、気が付いて一番困ったことは、いつの間にか、情報は与えられるものという習慣が身に付いていたことであった。

考えてみれば、必要な情報は自ら求めなければならないものである。しかし、そうと気が付いて情報を求めようとすると、それが如何に大変なことであるかを思い知らされることになる。まず、自分に必要な情報が何であるか、という基本問題に逢着する。豊かな趣味を持っている人は、趣味に生きることができる。新しい仕事を持てば、その仕事が求める情報を決めてくれる。しかし、それらがないと大変で、総てを一から始めなければならない。どのような情報を何処から入手するかということは、そう簡単なことではない。

日常の一般的な情報の入手は、テレビや新聞からということになる。在任中は、テレビや新聞の情報よりは、直接報告されてくる情報の方に信を置いて事柄を判断していたことが多かったように思う。新聞報道の正否も、直接の情報と比較しながら、見当を付けることが出来た。しかし、辞めてみると、新聞雑誌などの一般的な情報が基調となり、出発点になる。かつては職場で与えられた情報が基調となり、今度は、マスコミの情報が基調となる。何れにしても与えられた情報の中で、判断し行動していることは、同じである。退任して初めて、この与えられた情報の中でのみ判断していたことの重大さに気が付くようになった。

幸いにも教育研究に新しい職を得て、研究者や大学の教授と言われる人々の仕事振りに接し、次第にその仕事の大変さが分かりかけてきた。自分の必要とする情報は、総て自分で追い求めていかなければならない。人から借りてきた情報はその所在を明らかにしなければならない。人の情報を借りてくるだけでも大変である。たくさんの文献資料を漁ることになる。ましてや、自分である事柄の実態に迫り、新しい情報を得ようとすると、多くの時間と経費を掛けて、調査、実験、研究に取り組まなければならなくなる。

このように、自分で情報を求めようとする研究者の努力を見ていると、それまで他人の調査や研究を気軽に批評していたことが、憚られてしまうのである。しかしまた、その程度の情報を求めるのであれば、自分で下手な努力をするよりは、人の協力を求めたほうが早いのではないかと思うことも少なくない。情報は、追い掛けようとすると逃げていく。情報が自ずから集まるようになっている工夫も大切である。その点で、人の世話役をすると、情報の集まりやすい環境が出来てくる。情報を求めるにしても、人の力を借りることが出来るということは、大きな意味を持っている。

大きな組織の中で仕事をしていると、そこで与えられる情報にはいろいろな歪みが掛かっているおそれがあるということも、組織を離れて漸く気が付くことが多くなった。学者、作家、小さな事業所の主人、経営者など、一人で仕事をし、自ら情報を追い求めて、それを自分の生活や仕事に結びつけている人々の中に、素晴らしい判断と安定度の高い行動力をお持ちの方々がおられる。情報の質量からいえば、大きな組織の中で、情報を与えられている人のほうが、遙かに多くのものを扱い得るのであろうが、自ら必要とする情報を求める努力を加え、与えられている情報の意味やその正否を吟味することがなければ、情報の判断と行動に、大きな危険が加わる心配があるのではないであろうか。

売上税を廻る税制改革の蹉跌、日中・日米間に高まる不協和音の動き、内需拡大策の動向など、当面の外交、内政の諸問題の推移を見るにつけても、積極的に情報を求める努力が、もっともっと必要なのではないかと思われる。

浩志会の会員やOBの皆さんのご研鑽を祈るところである。

（浩志会理事
独協学園理事長）